大人過ぎた子供と
恋に汚染された女の話

大人過ぎた子供と恋に汚染された女の話

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14839025

ヒュンマ, ダイレオ

ダイ大　ヒュンマ前提のダイレオ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。
「希01」の後の、レオナ姫視点です。特殊な話ですので、1P目の注意書きをお読みの上、お進みください。
PixivさまのTwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

大人過ぎた子供と恋に汚染された女の話

【注意書き】

このお話は、レオナ姫視点のお話です。
レオナ姫のイメージをかなり崩す可能性があります。

あと、エイミさんに対してとてつもなく辛辣です。
タイトルの『大人過ぎた子供と恋に汚染された女の話』からご想像出来るかと思いますが、そういう話です。

エイミさんの感情はほぼありません。
悪意ある見方をしていると感じる方もいるかと思います。

そのため、お読みになる際にはご注意をお願いします。
読後の苦情に関しては受け取りかねます。

たくさんある妄想のひとつ、解釈のひとつですので、ご容赦願います。
希の後半に関係がありますが、読まなくても支障がないようにいたします。

□　□　□

マァムとヒュンケルを見送った夜……

「姫様」
　とエイミに声を掛けられる。
　来ると思った。
　十七歳で女王と呼ばれる少女は、にこやかに振り返ると「なあに？」と返事をする。
　彼女は、そんなレオナを見て目を瞠り、視線を逸らす。
「大変申し訳ありませんが……明日はお休みを頂いてもよろしいでしょうか？」
　用件はレオナの想像通りだった。
　長い片想い。
　それが、ようやく終わったのだ。失恋という形で。
「……お茶でもしない？」
　レオナは申し出には返答をせず体ごと少し傾げて、エイミをお茶に誘った。

　□　□　□

　侍女が用意したお茶と軽めの菓子。
　エイミは目線を伏せたままで、口を開こうとはしない。
　室内に漂う静寂。
　レオナは、お茶に口をつけると心の中で溜息を吐く。
「私は、個人の気持ちもとても大事だと思うの……場合によっては、とてつもないパワーになるわ」
　私が口を開いても、エイミは目線をやや上げるだけで返事はない。
　恋の奴隷。
　書物で読んだことのある言葉。
　自分の恋のためなら、家族も、友達も、良識も、ありとあらゆる何もかもを捨てられることのできる人。

なんて、迷惑なんだろう。

　恋の奴隷なんて生易しいものじゃない。
　恋に汚染されている。
　とても、汚らしい。

「ねえ、エイミ。あなたはパプニカ三賢者なのよね？」
　声のトーンを落として、瞳を真っ直ぐに見据えて尋ねる。
　三年前から、彼女のことをパプニカ三賢者だとは……あまり思えなくなっていた。自分の思いが優先事項で、周囲を気遣えない『賢者』など、賢者ではないと思う。
　パプニカ王国では賢者とは魔法使いの上位職というイメージがあるが、私は賢者とは深く考え周囲を見据えることのできる者が名乗るべき職種だと考えている。
　パプニカ三賢者は、言葉通りパプニカ王国のためにこそ、その知識を、魔術を、戦闘能力を使うべき賢者の称号。
　自称しているということに、責任を負うべき職種。
　だからこそ、フレイザード戦後の彼ら三人の奏上は衝撃を受けた……復興しつつあるとはいえ、パプニカを離れ勇者の旅に同行したいという彼ら。マリンとアポロは、しばらくした後に自分達の力量が到底及ばないと気付き、改めて謝罪をしてくれた。パプニカ王国と勇者のために裏方として動いてくれると誓ってくれた。私はそれを受け入れ、そして二人は本当にそう動いてくれた。
　目の前のエイミはというと……
　私の質問に「……はい」とエイミは答える。
　声が小さく、弱い。
　ここで力強く『私はパプニカ三賢者の一人です』と断言したりしたらどうしようかと思った。
　……多少の自覚はあるらしい。
　約三年。

彼女が恋に汚染された期間がようやく終わる。
　責務を放り出し、彼女が旅をしたがる日々が……
　私が、黙って様子を見守っていた期間も……終わる。
「……大魔王バーンとの決戦の時……いいえ、その後も……あなたの世界の中心はヒュンケルだったわね」
　エイミはこの確認に長い間躊躇い、そして「はい」と短く答えた。
「十二歳のダイ君、十五歳のポップ君、そして十六歳のマァム。あなたは、ヒュンケルという成人男性ばかり気に掛けて、本来気に掛けてあげるべき子供たちを故意に無視してきた」
「姫様！！」
「事実よ」
　短く断言して見つめる。
　悲しげな、理不尽だという表情。
　こういう表情に男性が弱いのを、知っている。自分が体験していなくとも、体験出来ないことでも、周囲をよく見ていれば推察することはできるのだ。
「特に、同性であるマァムに対して誰かがフォローに回ってあげるべきだった。それなのに、マァムの方がメルルや他の人たちの心配をしているくらい。まあ、あのお節介の塊こと慈愛のマァムには、それくらいがちょうど良かったのかもしれないけれど」
　くすりと笑う。
　いつも、誰かを心配したり、誰かを思いやっていた彼女。彼女の光が『愛』だと知った時に、確かに相応しいと感じた。
　私の攻撃的な口撃にも、彼女は「ハッキリ言うのね。あなたのそういうところ、すごく好きよ」と言ってくれるくらいだ。生意気な子供に慣れている彼女は、私のことを元気で可愛いなぁくらいにしか思っていないようだった。慈愛が過ぎる。
「最終戦線に赴くとき、マァムの感情を無駄に揺さぶって牽制して……女性としての愛にも恋にも気が付いていないあの子に宣戦布告して、周囲を上手に味方にして……賢（さかし）き者ってこういう意味？　って思ったものよ。本当に上手だった。見事な手腕だわ」

「……姫様」
「わざと言っているのには、さすがに気付いたわね……マリンやアポロはロン・ベルクに新しい武器を作ってもらうために、バダック爺と一緒に土下座までしたそうね……あなたはルーラすら使えないのに、彼らに付いて行くと言ったり、マァムを追い詰めたり、ヒュンケル中心に考えて前線で戦っている人に怒鳴りつけたり……大戦の役に立っていたと振り返ってそう言える？」
　エイミの顔面が真っ白になっている。
　だが、私の蓄積された怒りはマァムだけに対してではない。

　……ああ、そうか。この感情は『怒り』だったのだ。

　今、心の中で言葉にして初めて気が付いた。
「あなたは、ヒュンケルの生き様を地獄でのたうつと喩えたわ……パプニカ王国を滅ぼした男の贖罪の道を、パプニカ三賢者の一人の『あなた』が、地獄と言うの？」
　エイミが顔面を青くさせ、口元を押さえる。
　そう、私はわざと省いた。
　――――十四歳の我が国の王女、レオナ。
　そう、私。
　私も気遣われるべき子供の一人だった……はず。
「父親を殺されて……加害者にも事情があるのだと恨みを抑え、正義の道に邁進して欲しいと望んだ……相手は被害者の思いに応えて贖罪の道を歩んでいる」
　レオナはお茶を一口含む。
　ゆっくりと飲み込む。
　喉元を通るあたたかいお茶が、あたたかく感じられない。
　今は、いつもの私になれない。言いたいことを軽口を使ってすべて告げて、からかって、笑って、冗談めかす元気な私。そんな私は、今はお休み。だって……
　――――少女の私が叫んでいる。
　お父様。お父様。お父様。
　父親への愛のために歪んだヒュンケル。マァムがすべて話して聞

かせてくれた。ううん、事情を一番詳しく知っているだろう彼女に無理矢理話させた。
　それは、一人の男の悲しい話だった。
　わかっている。
　ヒュンケルを殺したところでお父様は還らない。
　彼は命じただけで、実際にお父様を討ったのはただのアンデッド。
　一国を落とすのに元首を狙うのは、作戦として正しい。
　パプニカ王国の滅亡が早かったのは、国王に大臣たち、大僧侶、大神官、裁判長……国を営んでいた王と国臣がまとめて殺されたからだ。
　残ったのは小娘一人。

　レオナ……
　やさしく、自分の名前を呼ぶ父王。
　あの腕のあたたかさも、声のやわらかさも、この手に戻らない。
　デパートに一緒に行った時のような楽しい思い出も、増えることは決してない。

　もういない存在に縋って、復讐をするなんてバカバカしい。
　そういう態度を取って、未来を見据える器の大きさを見せつけなければいけなくて……その場では、許しと枷と寛大な呪いを告げることしかできなかった。

　なのに、彼の贖罪の道を、私の仲間たるべき人が『地獄でのたうつ』と言う。
　酷い裏切りだと思う私は、心が狭い。

パプニカ三賢者全員に裏切られた上の、さらなる裏切り……世界が真っ白になった。私の感情など慮られない。見放されるというのは、こんな気持ちなのかと、なぜかぼんやりと思ったものだ。
　だから、疑問符を浮かべるダイ君に、咄嗟に答えられなかった。
　冗談にしないと叫び出しそうだった。
　死んだ者たちへの贖罪の道を『地獄』とあなたが言うのか！？
　じゃあ、罪なき身内を殺された、私たちの行く道は……

「それを地獄と喩えるのなら……私たち被害者は、加害者に贖罪をしてもらってはダメなのかしら？」

　意地悪な言葉にエイミが息を呑む。
　強い。強い。強い。
　―――聞き飽きた。
　私は強くなんてない。
　ただ、大人過ぎた子供だっただけだ。
　フローラ様だったらなんて言うかしら？　と懸命に考えて導き出した言葉がヒュンケルに掛けた言葉だった。

　　あなたには残された人生のすべてを
　　アバンの使徒として生きることを命じます……！
　　友情と正義と愛のために己の命をかけて戦いなさい
　　そしてむやみに自分を卑下したり
　　過去にとらわれ歩みを止めたりすることを禁じます……！

　今、エイミに話しているのだって……ただの八つ当たりだ。

私はちっとも女王らしくなんてないし、大人でもない。大人の振りが上手な子供のままだ。
今が、一番みっともない……！
私が一番、過去に囚われて、捕らわれている。
こんな私……

コンコン！

扉の叩かれる音に顔を上げる。
「レオナ、入るよ」
ダイ君の軽やかな声が聞こえたと思ったら、彼がトレイを持って扉を開けて入ってくる。
「レオナの気が凄く乱れてたから、心配になって……はい、飲んで」
渡されたカップはあたたかなレモネード。
両手でカップを持つ。あたたかい。
そのあたたかいカップに、そっと口をつける。
「……酸っぱい」
酸っぱ過ぎて涙が出てくる。
涙がボロボロ零れて止まらない。
「……ダイ君、酸っぱいよぉぉ」
「うんうん、酸っぱいね」
ダイ君は私の涙など気にするでもなく、隣に椅子を持ってきて座って、背中を撫でてくれる。
エイミは何を言うでもなく、私たちのやり取りを固い顔をして見つめていた。
そんな彼女にダイ君が話し掛ける。
「……ねえ、エイミさん。あなたは戦場でもいつもきちんと化粧をして身だしなみを整えているよね」

ダイ君もようやく化粧という概念を覚えたのね……以前は「あの人、生肉食べたの？　口が真っ赤だ」って不思議がっていたっけ……
「……え、ええ」
「マァムもレオナも、戦場ではそういうことを考える余裕もない毎日だったんだよ……」
　ダイ君の静かな言葉にエイミは何も言えない。
「その……所謂女性の戦いみたいなことを、マァムやレオナに仕掛けるのは止めてもらえないかな？」
「……え？」
「レオナ、これでも十七歳の女の子なんだよ。お父さんもお母さんもいなくて、国を一人でまとめなくちゃいけなくて……しかもオレまでずっと行方不明だったし」
「ダイ君、これでもってなによぉ！」
「レオナは黙ってて」
　静かな制止にレオナは黙ってレモネードを啜る。
　こういうダイ君には素直に従うしかない。
「……あの、女性の戦いって」
「あなたは、嘘でもマァムとヒュンケルを祝福するべきだったんじゃないかな。傷付いていますって感じで遠くで立って俯いているって……二人に何を感じて欲しいの？　そういうのを、オレは女性らしい戦い方だと思う」
　レオナは目を瞠った。
　ダイ君のがきつかった。
　……確かにあれはあざとさが勝った。周囲もどう声を掛ければいいのか途方に暮れているのがわかったけれど、私は無視をした。
　人のいいマァムやヒュンケルは会釈をしていたけれど。あんなの無視しておけばよかったのに。鬱陶しい。
「ポップはちゃんとヒュンケルにお祝いを言っていたよ。自分の気持ちにキリが付いたって泣きながら笑っていた。ヒュンケルも、ポップに声を掛け難かったみたいだけど、ポップを信頼して感謝していることが伝わってきた。きっと、次は二人とも笑って話せると思うんだ」

「私の思いは、ポップ君みたいに軽くない！」
　エイミの反論にダイ君は目を瞬かす。
　私は……口が開いたままになってしまった。
「ポップの思いが軽いって、なんでエイミさんが勝手に決めるの？」
　声の重さに身が竦む。
　戦場での気配に近い。
　慌てて口を閉じて、息を呑む。
　無意識に汗が流れてきた。
「誰それの思いが重い、軽い。そんな比較は無意味だよ。そういうの、止めて欲しいんだ……男女の恋愛だけが至上で、自分の心が一番大事っていう考えがあるってことは知ってる。でも、それはエイミさん個人の考えだよね。押し付けないで欲しい」
　ダイ君が深呼吸をする。
　そして、私の背中をしばらく撫でてくれた。彼自身も落ち着こうとしているのだろう。
「……一緒にいれば、ヒュンケルが自分を向くと思った？　ヒュンケルを見ていれば、彼が自分の心を抑えて贖罪の道、正義の道をひた走っているのってわかったはずだ……それでも一緒に居たのって……なぜ？」
「そんなの、いつか絆されるとか、もしかしての一夜の過ちを期待していたに決まっているでしょう」
「だから、レオナは黙ってて」
　私が口を挟むと、ダイ君に頭をぐしゃぐしゃにされる。仕方ないので酸っぱいレモネードをまた口に含む。
　本当に酸っぱい。
　涙が浮かぶ。
　とりあえず、汗は引いた。
「ただ、一緒に居たいって……美しく感じるかもしれないけれど、ヒュンケルは断ったんでしょう？　それでも食い下がった意図は？　その間、マァムは変な遠慮しちゃって……二年近く、碌な会話も二人はできなかったんだよ。第一、いらないって言ったのに、強引にでも受け取らせようとするのって、自分がされたら迷惑じゃ

ない？」
　エイミが眉根を寄せる。
「同じアバンの使徒なのに。二人それぞれから話を聞いて、オレ吃驚しちゃったよ。あんなに端から見ても両想いなのに……二年も、ゆっくり話すらできなかったなんて、酷いよ」
　確かに……ヒュンケルを見れば飼い主を見つけた子犬のように全身で好意を露わにして駆け寄るマァム。マァムに対してだけ目付きがやさしさに特化して変わるヒュンケル……わかりやすかった。
　信頼し合っているのが明確に伝わってきて、微笑ましく感じた。
　恋愛とかそういうのを除外しても、アバンの使徒同士、話くらいしても当然だったのに……
　それまで、邪魔していた……？
　恋の汚さ怖さに吐き気がする。
　――――私もいつか、こうなるの？
　あたたかい物を飲んでいるのに、寒い。
「まあ、マァムが自覚するのにそんなにかかるなんて思わなかったから、結果としては良かったかもだけど……」
　ダイが大きく溜息を吐く。
　そして、静かにエイミを見据える。
「パプニカ王国・三賢者のエイミさんにお願いしたいんだ……オレは、女性の戦いはわからない。それをレオナに教えてあげて欲しい」

　女性としての戦いをマァムやレオナに仕掛けるな。
　女性としての戦いをレオナに教えて欲しい。

　レオナは、そんなことを言うダイを目を瞠って見やる。
　二年の間に体はすっかり成長したと思ったけれど、心までこんなに成長していたなんて……戻ってきてからもどんどん背は伸びているけれど。

「エイミ……明日、休んでもいいわよ」
　レオナは一つ溜息を吐いてからエイミに告げる。
「姫様……」
　絶対に許すつもりなんてなかった。
　明日休んだら、パプニカ三賢者の称号を剥奪しようと思っていたくらいだ。でも、ダイ君のお願いを聞いたらそれを告げるのがなんだか馬鹿らしくなってしまった……
　心の中の十四歳の私はまだ泣いている。
　お父様。お父様。と……
　お父様、宰相、大臣のおじいちゃん達、大僧侶のおじさま、大神官のおじいちゃま、裁判長の髭おじさま……小さな私を可愛がってくれたやさしい大きな手達。あの笑顔に溢れた王宮での日常は、二度と戻ってこない。

　でも、泣いても世界は変わらない。
　顔を上げて戦って手に入れなければ、世界はそのまま。
　時折顔を出す十四歳の幼い私は、十七歳の私が心の中で慰めよう。
　裏切る人は……その人の心根こそが薄汚いだけで、十四歳の私が悪かった訳じゃないって。

　ああ、私も認めるしかない。
　―――近くで見ているから、心の片隅の小さな憎しみが治まらないのだ。
　ちょっと離れれば、きっと私のことだから笑えるようになる。

お父様、もういいわよね。
　私の親友が結婚して幸福になるのを、心から祝いたいの。
　だから、祖国の仇を許すわ。
　解放するの。
　贖罪が済んだからじゃない。だって、ヒュンケルは勝手に贖罪を続けるだろうから……そんな男だから、マァムはきっと好きになったのだもの。
　もしも、また悪の道に彼が走ったら……そんなことは、絶対にありえないけれど。でも、もしもがあったら、マァムにダイにポップに私……アバンの使徒が総掛かりで止めるから大丈夫。大将にアバン先生もいる。必勝の布陣。
　しかも彼らは絶対に私を裏切らない。
　まず、真っ先にマァムの鉄拳制裁が下るはずだ。それを脳裏で描いて留飲を下げるくらいはしてもいいだろう。愛しい人からの、壮大な踵落としを喰らいやがれ！
『ヒュンケル、めっ！！』
　子供を叱るようにヒュンケルを叱るマァムを想像して、口元が笑みで緩んだのを感じる。
　うん、いつもの私が戻ってきた。

　私の呪いから、ある男を解放する。

　それを、ようやくすんなりと認めることができた。

エイミは結局何も言わず……一礼して、部屋から去っていった。
「ねえ、ダイ君。相談に乗ってくれる？」
「……レオナの相談って、確認のことが多いよね」
　ダイ君は少しばかり目を眇めながら苦笑う。
「そーとも、言うわね。でも、きっと良い話よ」
「レオナがそう言うなら、そうなんだろうね」
　ニカッと、ダイ君が出会った頃と同じ笑顔を浮かべる。
　祖国の仇を一人許すくらい、とても簡単なことだと思えるような素敵な笑顔だった。
　もちろん、『不死騎団長ヒュンケル』と『アバンの使徒のヒュンケル』を別と考えるべきだという声があるのはわかっている。
　でも、まだ私の中では引き離して考えられない。ひょっこりと彼への恨みが燻る時があるのだ。
　だから、まだ私の中では……まだまだ、まだまだ彼は祖国の仇なのだ。
　仕方がない。
　きっとダイ君に話しているうちに、私の中でも整理されるだろう。私は知っている。私は理知的で、しっかりしていて、明るくて元気で世界で一番強い、前向きな女の子だから。
　人目があるところではこんな感情、見せたりしない。
　見せる訳がない。
　パプニカ王国の聡明なレオナ姫じゃない……恨みがましいねちっこい私がいることを、知っているのは目の前のダイ君だけ。だって、ダイ君以外、誰も私に寄り添ってくれなかったから……
　ダイ君がいれば、私はいつものお姫様な『レオナ』でいられる。
「……ちょっとは元気が出た？」
　ダイ君が私の頭を撫でてくれる。
　年下の君にこんなふうに縋るのは、本当はよくないかな……ってちょっとだけ思っていたりするんだよ。
「……うん」
　でも、ダイ君が嫌がる素振りを見せない間は甘えてもいいよね？
「レオナは、百面相してるくらいが可愛いよ」

……え、それって褒めてる？
　隣を見やれば、彼はやさしい瞳で私を見ていてくれる。
　そんな彼に両手を差し出す。
「ダイ君、ぎゅってして」
「はいはい」
　ぎゅっと抱き締められて、目を瞑る。
　――――私も、このぬくもりを手放さないためなら、卑怯な女にでもなるかもしれない。わからないけれど。
「……レオナは教えてもらっても、女の戦いは到底できないと思うよ、オレ」
「なんでよぉ」
「だって、レオナ、猪突猛進・勇猛果敢だもん」
「女の子への褒め言葉じゃなぁい！」
　でも、確かに……私に向いた戦法じゃない。
　ダイ君の腕の中で、素直にそう思う。
　猪突猛進・勇猛果敢。いい響きだ。
　私を包むこの腕があるなら、私はそんな女の子でいられるだろう。
「ちゃんと、女の子扱いしてるよ。オレ」
　ダイ君はそんなことを言いながら、私の背中を子供相手のようにぽんぽんとやさしく叩いてくれた。

　翌日、エイミは休むことなく業務を遂行していた。
　私はなんとなくほっとする。
　彼女と、元のように話せるかは……わからない。
　というか、元のようにが……もう、思い出せない。
　……私も、いつかは恋で身を汚染したりするかもしれない……でも、先のことなんてわからない。綺麗なだけの人生なんてつまらない。私は穢れも汚れも飲み込んで、正道を貫いてみせる。と、思っ

ていたい。

　さあ、私の親友と祖国の仇の結婚式を盛大に催そう！
　右手を振り上げて、張り切って、諸外国への手配を始めた。

おしまい

＞＞

随分昔の初読時、海の告白シーン……エイミさんが自分勝手過ぎて、読んでて不快になってしまいました（遠い目）
ロマンティックに全く思えなかった……

恋するエイミさんは、自分のみの感情で動き過ぎで苦手……
他のキャラが大義で動く中、彼女だけ異質で読んでいて違和感が凄かった思い出。

まあ、幸いなのはエイミさんの『地獄』発言を、ヒュンケル本人が

知らないだろうことですよね……もし知ったら「これが地獄など、生温過ぎる！」とか言って、もっと過酷な道に走りそうで怖いです。

この話のエイミさんがどうなるかは……正直、わかりません。
とりあえず、給料もらっているなら、給料分は働いて欲しいところです。というか、パプニカ王国は月給制？　年俸制？
新アニメ見て思ったのですが……ヒュンケルに出会う前のエイミさんは本当にいい人だな……素敵な女性だ。
……恋って怖いなって改めて思ってしまいました……

あと、レモネードを持ってきたダイ君には、書いてて自分で吃驚しました。脳内ダイ君のセ○ム度が凄い(笑)